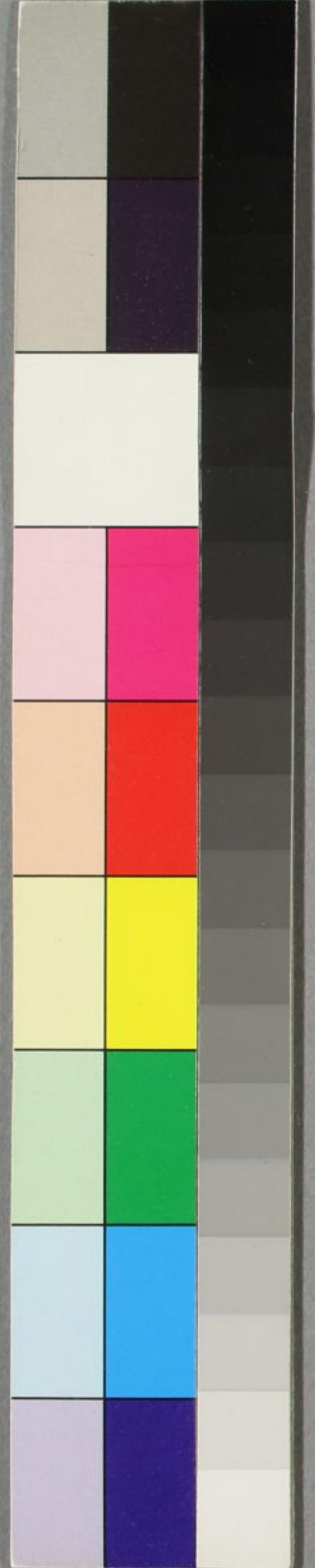


義仲勲功圖會

八

~ 13
3380
8



13
3380
8

木曾義仲勲功圖會後編卷之三

齊藤別當実盛戦死條

浪速 山珪士信考訂

昔吳起楚王少兵沈沈曰今夫齊其國富君臣驕奢而簡細民政實而
録不均一陣兩心前重後輕故重而不堅擊之道必三合之猶其左右脇
而從之其陣可壞且宜先哲之言今平家の軍勢ハ吳起ウ所習
乃兵不均前重後輕故木曾殿の二計當らるる粉乃如く確るれ
篠原の戰場今平家の軍卒一人も踏留る者なく悉く落失々々小松原小
引添く扣く一將あり其扮装奈何とけれど赤地錦乃甲袍小萌黄威乃
甲乃銀乃裾金物少々草摺長小著下白星乃五枚胃猪首著て十
八指たる石少の征箭を肩重ぬの弓の真中より黄金造乃太刀鷗尻小死
連錢蓋毛の俊足小金覆輪乃鞍を置て跨り引行身方小因中うけど北
面小歩子せり茲小木曾殿の即黨小信濃國乃任人手塚太郎光盛ハ天

功功圖會後三

大正十一年八月廿九日
本大學出版部
贈

暗能敵もが組で勝負を決せんもの成と約を逸れて蒐きつり遙か彼武
 者我刀を大の恰び是を平家の大将軍なりとて。弥馬を進ぐ先声
 我掛く叫りつる天暗敵將の赤粉や後小續く勢もあつる尚も
 約を進めよ大將軍う侍う速小名称も斯や木曾殿恩顧の即ホ
 小信濃國諏訪郡の任人平塚別當が嫡子小名太郎金刺光盛と名
 稱する彼武者完示と歩笑健気ゆも名稱する我姓名成も言せし
 たりれども。サリ子細あれも名名稱も汝が為る過分の敵と首成とて木
 曾殿の實儉小備か。姓名も自然著明高名他小殊なすべし。や組ん
 とのさう。ふり投捨くを向む光盛の心はつらと約蒐寄て無手と組。光盛
 の皮ゆる大刀かれ。唯捨伏人とサリ。小案小相違く。此者の刀我小まきり
 くれ心大いふおとら。一世の大吏と物身乃刀成究て操合。余り。今。鐘
 踏切敵と組。つ。両馬が向ふと。落上成下と。操合。遂小光盛と。つ。伏

られ。あ。や首成搔切んと。と。折し。の。あ。手塚が。即。黨。浅。間。小。高。次。と。り。
 者。弛。き。り。主。成。助。と。組。付。成。彼。將。光。盛。を。膝。小。引。敷。き。り。小。高。次。を
 給。小。児。の。一。掃。天。晴。已。日。本。一。の。嗚。呼。の。奴。か。我。刀。小。く。く。死。と。り。ハ
 知識乃引接あも勝きりとのひさる腰刀接て首搔きり其透成刀て手塚
 ハ敷きさう下より刀拔持敵の甲草摺たをさく挙も通まこと二刀刺是
 小仍く流石の敵も瘡む処を光盛曳やと刻返し抑へ首成を搔くりなる
 斯く光盛敵の直垂の袖引裂て首成包も太刀胃成合捕し我馬小赤
 晴り大将の本陣（馳行り）此時木曾殿敵徒も遠く逃延れを陣中
 あり首実儉ある小身方討取首二千七百六十余役と記ぬ其中小入善
 小太郎安家高橋判官長綱を討取と記し有るを。木曾殿合善成近く召
 是汝初陣小敵の侍大将討し条神妙なりと殊小御感稱有入善噴で
 中や。何れも包もつた。実此首某が伯叔南保次郎家隆が討取処あり

と言上と。木曾殿討り多し其顛末を問ふふ入善子細を包ち子細りえむ。大将却て御賞美あり。軍のあひ人の手柄をも我手柄おせまわしあひ汝への叔姪互ふ手柄を相譲る。其争ひ君子なり。初め汝が組より敵をれを首汝が手柄となり。南保ふの檢賞成とふぞとて。召出でて太刀一振下されけまこと。兩人の君思ひ拜謝して退たり。其次の手柄太郎先盛木曾殿の御前小侍。某希有の敵討討りて姓名成名抄いとせども。おりの子細有とく名乗ひつす待くとおのひらむ錦の直垂成著し石抄の征前成負いさしむ。大将軍うとをれを續く勢もなり。京師西園をどの者ことおりの初ま坂東声なり。若者うとをれを武者化粧よれども額小皺の涙をこも。老人うとをれを鬚鬚類ともお黒く。最期の砌木曾殿の突檢小備をて姓名も自然著明うとてとやいひ。その何者の首小や不明いとの高賢おとる。いとの件乃直垂の袖お布て首成呈し。木曾殿是成見おの突も不側り

者乃首うふと女時お守りて御坐るる小樋口次郎立寄て此首成かろより泪然潜流と流し。あか無慙や是は平く武藏の存る別當実盛が首あく。何の故小斯鬚鬚類ナク墨お染いひりやん。洗はせく御覧いとゆふと。木曾殿ゆ初く吐息しおひ。我も実盛の面小似しりと。かををまごも。錦乃直垂を著せしとのひ鬚鬚類の黒をれむ他人おやと思惑へり。先盛をれ洗て見よと仰とて。手柄承り。首をらとて近辺の池水やあひらるる。実も緑の黒髪とる。しも頭て雪の白髪と成をれむ。光盛も諸ハ強るるも宜。各小高丸実盛とると感慨。大将の御前小跪く首を呈しぬ。木曾殿一眼見おひく愁泪雨の。首小向ひく搔口説おや。諸ハ実盛墓なくも戦死し。その予御辺が武の情小よりて悪源太が害免免。木曾小人と成く恐惶も故高倉宮の令旨成清。義兵成幾く北陸道を手小属せり。偏小御辺が賜なれむ。數度味方小招くとつ。平家乃思成捨むを敵となり。尚我即

此圖は又
二天の末
ふんぎを
割助の
過て十美
なり



岡本次郎
最明法師
と生虜図

魚工區會名三



物切圖會名三

黨小命ト。実盛とんるなうを助もと言一。意先知一。斯面影。我変自。称
 也。寸を討ま。心申こそ健気な。斯許。かひ切ら。鉄石心。助くとも
 よも生。去か。義仲七日。間御辺。懐小抱。ま。りとき。けむ。則七日の。又
 少。活命。の思人。あ。我即。黨の手。小掛。させ。我刃。わ。討。中。は。並。あり
 あ。心。憂。や。と。慚。愧。の。泪。小。甲。の。袖。を。絞。玉。ひ。一。借。も。実。盛。錦。の。直。無
 残。著。せ。一。こ。心。ほ。の。誰。あ。る。生。捕。の。中。の。も。妹。尾。兼。安。侍。大。将。を。れ。を。更
 の。本。末。知。は。人。引。出。して。尋。よ。と。仰。と。倉。光。三。郎。承。り。と。妹。尾。を。繩。付。の
 俣。わ。く。引。出。し。遣。此。方。小。引。居。り。木。曾。殿。妹。尾。小。向。の。ひ。ひ。小。兼。安。侍。着
 実。盛。が。石。寺。の。征。箭。前。然。負。錦。の。直。垂。著。せ。一。最。不。審。妻。り。女。其。故。を。知
 なる。と。語。て。せ。せ。い。へ。仰。々。れ。兼。安。承。り。実。も。其。義。小。於。二。條。の。物。結。の
 以。更。長。々。れ。と。結。中。を。一。実。盛。一。時。某。小。語。り。い。弓。箭。前。と。者。の。戦。場。向
 と。何。ゆ。も。若。く。壯。か。る。内。こ。を。面。白。々。れ。実。盛。う。と。く。翁。さ。び。て。戦。場。小。臨。ま。む

若殿原ハ見悔リ進まず老の我慢と憎む退む老も拳と矯らち。うて敵ハ
 老者成射て甲斐なりと眼れも掛ぞれ。実盛ゆ於ハ鬚鬚を墨小漆
 思。終。花。中。小。武。具。と。戦。場。向。を。や。と。お。り。ひ。ぬ。絨。小。朽。惜。も。の。老。の。白。髪
 かり。これ。俊。成。卿。の。述。懐。の。歌。ゆ。の
 澤ふをよる若菜を。ねど。い。げ。ふ。年。成。は。む。み。の。袖。ハ。ぬ。ま。さ。り
 と。け。ぬ。ぬ。の。亦。唐。土。の。張。九。齡。が。詩。ゆ。の
 宿。昔。音。雲。心。蹉。跎。白。髮。年。誰。知。明。鏡。裡。形。影。自。相。隣
 と。賦。と。老。の。齡。成。歎。と。と。や。と。結。玉。の。ひ。ひ。が。其。約。を。違。む。と。若。か。た。て。討
 死。仕。ま。し。ふ。と。い。ひ。ら。又。錦。乃。直。垂。石。寺。乃。征。箭。ハ。実。盛。出。陣。乃。前。日。右。大
 臣。乃。絆。ハ。参。里。実。盛。東。國。征。の。先。鋒。成。蒙。り。一。節。身。方。水。鳥。乃。羽。音。小。皮。怖
 しく。蒲。原。より。逃。客。を。い。更。某。一。公。乃。耻。辱。と。お。り。ひ。ひ。今。度。北。國。下。り。を。む
 如何。ゆ。も。忠。戦。を。抽。時。宜。小。因。て。ハ。花。々。く。戦。死。を。遂。故。小。松。内。府。より

以来乃鴻恩成報一の命。但一実盛武藏の永井小住居仕さきも生國ハ
 越前中富樫井上たんの者ども親一死一族ゆくいむ彼亦がかりん処
 中いむ老乃思出小何卒錦乃直垂石布の征前御免賜りくいむとサハハ
 今願ひひ小宗盛御も初御并容乃色方るるるる流石旧切乃実盛乃
 願成叶さるんも如何とや思召さ御料もく初置ま錦乃直垂石布の
 征前より添く賜ひ実盛是成三度押戴死勇進ん出陣仕りひひと諸
 々れ木曾殿倍感涙小喉の彼唐山の朱買臣ハ故卿の會誓錦乃袴と
 著して下王文徳を暉。今乃実盛八田里乃加賀錦乃袍を著く武勇
 乃譽を残下々々実盛も衣かりたりと。手塚を近く召き汝此首を然
 死寺小葬り懇小孝養せりやと命一ゆ光盛承り竹原寺ある寺
 僧小命一と首成埋せ追福作善成管せ々々其古跡今猶彼寺小遣れり

覚明密使 在 最明刑罰條

斯く平家八十萬騎乃勢七萬余騎を打ち残り兵三萬騎小不足お大
 將二人侍大将若干討死々々を勢ハ逼り力窄り北園小足成流る度
 不能這々都ハ逃上りな々々木曾殿乃武威遠近小震以草々も亦
 勢ハ中越前乃園府まで押上陣成居らふ然々々木曾殿ハ中竊
 小大夫房覚明を招允壺々小命せ々々平家十萬乃猛軍も身方乃
 武勇小碎々々都ハ逃上り勢三萬騎ハも過下を再度征兵二下
 々々々々々々々々身方今勝小兼々々々乃勇卒成率々々京城ハ
 押上り十々七ハ勝利を得下。されも茲小一箇の難義あり平家従来
 山門と相親々互小相救乃約ありと。前小高倉官義兵思々々山
 門平家の味方せりと。更ハ破さるれ此度々々平家山門心成合せ坂本
 乃用害小支ハん身方湖上小船を走らせ浦々々小釣成進々々山法師
 々々小村々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々々

大吏方り熟俊と云ふ此度の軍の勝敗と山門を取と不取あり御房と
 山門の中住り衆徒の智愚剛億成も云々何卒姿を捨し身方乃
 士卒ゆも知せと先達て山門登り旧好の法師成相結一山の衆徒身方へ味
 合体と云ふ中量りて又山門の衆徒と一味せと平家成滅と云ふこと我
 掌の中あり御房も此親客成なりおとどろかざる。平家征伐の一の功を
 下と云ふ仰せ。覚明と云ふ考て中々る愚僧山門不在時衆徒の意を弒
 見ん小義小疎く怒ふ耽る更凡俗小過より原素主と頼る方も。唯時
 の強弱を云々其強小従ひ弱を欺た偽詐表裏の更更強言水上の萍
 の風小順と或東一或西と云々如し。平家寺領成倚財宝を抛く相
 結と云ふ三千乃衆徒心成等しく平家小従ふを云ふ。中平家の暴
 悪成憎と或源氏乃義兵を潔と云ふ者も。愚僧先山門へ忍び登り
 旧織の法師原成と云ふ年若乃及んけ身方小親と云ふ。一と云ふ大

衆御身方仕と云ふ山上小遠火成揚山へ。然る君の御陣あり火を揚相図を
 合し火急小攻登り更より。山門小御身方仕と云ふ愚僧三寸不
 爛の舌頭成りつと衆徒小口士軍と云ふ平家へ荷擔と云ふの違を。し
 り愚僧小速小飯りきりい登り。堅く約定と云ふ木曾殿大不悦び。猶
 蜜策成示し合し。法師原十人行成覚明小附夜中陣所を出され。知
 者ささふなり。諸聖日本曾殿本陣。諸將を招れ集り平泉寺の長吏
 最明を曳出させ。迷小直下と仰せ。如何愚僧汝桑門持戒の身方。云々
 刀杖小携る。小あふ。一旦飯降の誓盟小背平家。反忠と云ふ。燧を城を隔れ
 若子乃軍將士卒成屠殺せし。奈破戒も無慚と云ふ。云々方成死悪逆なり
 それ應報。車輪の轉と云ふ。如何因果と云ふ。絆る繩の。云々。已積悪已が身と困
 め忽ち小虜と云ふ。天罰の程。如何。云々。仰せ。最明。及して曰。夫
 我平泉寺。平家の恩成。荷し。多年無二の法檀。云々。初より荷擔の勝と堅

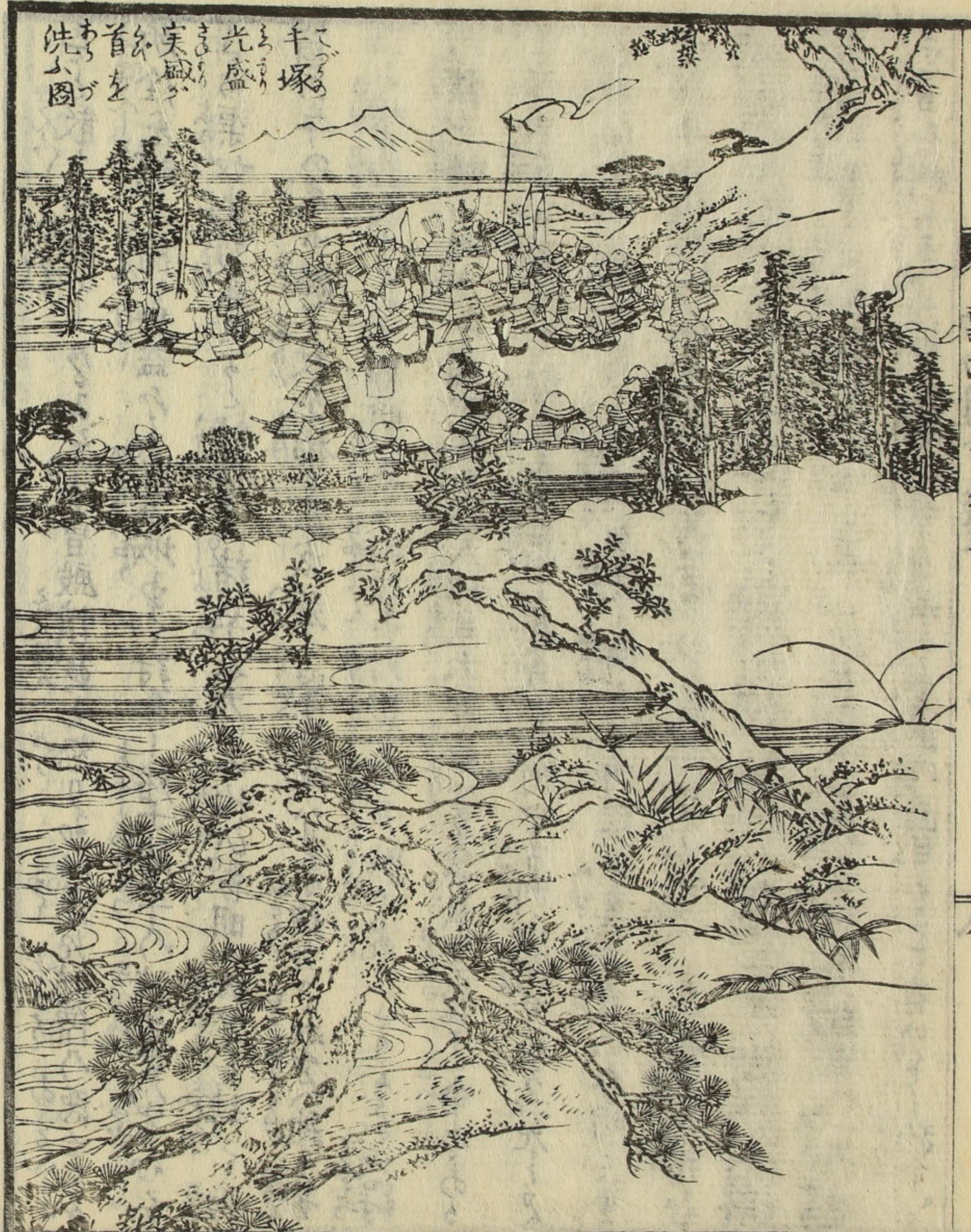
とつとも洋々御辺小降し平家の征將下向戎待及忠しく安々御辺を
 討せんともなり然るを悟むし無二の身方と頼も燧々城へ籠られし是
 御辺の愚昧なり因て我平家の為小内應してこそこの要害は一時小責
 落せし我方す謀ふしなり我も平家時の運拙く其後の交戦利なく
 緒將陣没し我も虜となれるハ時う不肖今更悔むふしこそは存明を
 不義謀叛とやするれど原來御辺と何う好まなく詐く降きむ豈謀叛の
 名のあるし御辺こそ勅勤浮浪の身をとりて表小宮の令首戎唱(意ハ
 平家の繁昌は猶と隠謀を企せり動乱を醸さるる条承平の將門原平
 の負任小比し死不義謀叛の棟梁なり平家一旦の軍小敗とるとも今上り
 外叔として五戎七道其恩澤小浴をれを傾て四圍九列山陰山陽の諸軍弛
 上り北征小忠戦を励みなむ御辺終小折を勢ひ突り身を縲紲小辱め
 られ京洛の大路を曳渡され集木小首を晒されん事我今の身小異るべし

こと散々小悪口り乃ほど木曾殿憤然と怒りし小悪口賊僧の悪言小
 所詮先賊と論無益なり燧々城ゆく討まし諸士諸卒の憤靈は省心小
 ころ渠奴牛裂れせよと指揮ある諸卒亦大の小怡び存明が両足を縛り兩
 箇の牛の尾小結り杖を揚て牛は強く擧む牛は是れ小強たて双方(弛る勢
 小唯見一人と見え存明存心り兩段小引裂れよと一声號で死しり天罰
 の程を怖しぬ次小備中團の住人妹尾太郎兼安父子が曳出せし命令あり
 士卒亦命小應して妹尾を曳出し是れ如何なる刑小所せざるべしと見
 る所小木曾殿半ばく其縛を免し仰せし御辺は不義表裏の存明と其
 違ひ平家の侍の中も勇切其内えある勇士なり我深く其將才を惜む
 向後心茂改め義仲小隨從とす小於て永く技知し成功の後ハ過分の所領
 を与行登し不知從や從まらまると問ふ兼安頭を低某小敗軍の將速
 小首を刎らるべし小仁命を承る更武の面目とこそ存いり物命

幼刀圖會後三



こ千塚
光盛
まふ
実盛
首を
あぶ
洗ふ
園



蕪江圖會後三

防戦せん支叶ふ事ならず。且先王上皇成供奉し西國(西國)用きく四國九列の兵
然聚め其上より源軍と雄雄を決せしやとぞやれども。一門乃是成安と各
面然見合せ唯吐息とぞ許なり。時小新中納言知盛眼小血成洒きてやれども
是は右府の討とも覚む。抑當家曩祖桓武天皇以来廿余代帝都下任し就中
平將軍負盛より弓箭不携りて故大政入道殿より一度も不覺の名成とす
然も小未敵の旗の色成ゆん。都成落と未代すくの突成遺きん。武門の瑕
瑾弓箭の朽名なり。や運盡て戦死とすとも骸を王城の土とこそやれども
なれと氣色を損じたり。やれども薩麻守忠度能登守教経をまめ耻を知
く。後口成とぞ(知盛卿)仰こそ実渾とれ。兵杖不携り身名こそ惜れ。唯
矢種乃有ん限り射尽し。叶ふこと家々小火をうけて自害せん。何余更
あらば死といふあそ。宗盛も今ハカなくはる。防御の手賦あられい。と流るり
や。いぬ知盛怡び。配當仕りて先新三位中将資盛を大将とす。

肥後守貞能を差副其勢二千余騎守治より田原を廻り近江路(指)向らる
左馬頭行盛薩守忠度六千五百騎より淀一口(向)色知盛六本三位中将重
衡能登守教経と俱小三千余騎より山階口(向)れ多。此時又洛中(小)能歌
より京(攻)上り多田藏人行綱(共)撰津小兵船を聚り川尻を切塞じぬと皮へ
く。京洛乃賈賂魂を消し。今ハ緒道の通路塞りぬと偏小盤(中)の真の心
地(山林)辟地小逃隠る者引ぬと。浅掻りりり次第なり。却鏡大夫房覚明
小本曾殿の内命成蒙り蝶状を懐小。同伴の僧と俱小敷岳小潜登り頭
真阿闍梨乃行(往)本曾殿の内命を傳(一)山荷擔の義を憑とれ。阿闍梨
小北陸官世小出ぬ。死期到来りと怡び。日來無二の法類ある慈雲房法橋
寛覚三上阿闍梨珍慶白井法橋幸明方んと成。小高嶺ある小何方も早
速(同)意(れ)ぬ。北六(一)山(の)大衆を聚め事を議せんと大鐘を衝鳴りて三塔

乃衆徒を大講堂に聚免。木曾が蝶状を披露し。此義奈何あらんと疑
 ともふ。大衆も一山乃浮沈に係る大事をなす。各是非を分る。口は吐て聲を
 処ふ。横河律師堪慶と。荒法師進と出く。曰。抑當山桓武天皇高祖傳
 教大師と睿慮を合し。あひ。天下安全百王鎮護の爲。延暦年中。草創有
 一聖場あり。睿慮無比と。と。いふ意を會。比。睿山と号し。時乃年号と以
 て延暦寺と呼せ。あ。凡日本六十八列の内。靈山名利。号し。い。い。年号と寺号
 而下し。あ。當山の外。亦有事なり。然在し。より。以来。今上天子。あ。帝王三十
 三代。四百余歳の春秋を歴。ま。も。天子の崇信深。列卿の偲仰怠。就
 中平家。桓武帝の皇孫と。て。二門の崇敬。他。小異。小誓願を三塔九院の法
 力。寄る。更。先達。て。彼。二門。連署。して。吾山。乃。与。力を。憑。む。書。中。小。明。白。なり
 然。る。小。多年。懇。志。の。平家。を。捨。且。卒。爾。の。木曾。小。与。力。せん。と。旁。其。繩。を
 た。く。と。憚。る。色。なく。や。くれ。れ。満。坐。の。弟。大。衆。實。理。と。い。かり。ひ。た。が。猶。も。言。葉。と

發。く。く。の。小。白。井。幸。明。進。出。く。大。の。叫。で。曰。堪。慶。脚。房。の。説。と。も。其。本。を
 捨。其。末。を。執。の。論。あり。ま。が。事。の。宜。を。盡。さ。ず。そ。れ。我。山。小。王。城。の。良。を。鎮。め。代。々。の
 帝王の宝祚長久を祈。し。四海万民の安。靜。を。唱。る。靈。窟。なり。然。る。小。故。大。政。入
 道。一。時。の。虎。威。小。募。り。昇。進。の。位。推。し。誇。り。て。高。倉。院。の。法。位。を。下。し。なり。法
 皇。を。押。籠。刺。し。高。倉。宮。に。弑。殺。し。く。大。路。を。渡。し。或。八。月。卿。雲。客。を。配。流。し。或。ハ
 東。大。園。城。を。燒。拂。か。ん。ど。和。漢。い。ま。其。暴。惡。小。類。と。る。者。を。不。受。され。て。天。惡
 地。怒。り。天。變。地。妖。の。凶。兆。を。現。し。遂。ハ。大。政。入。道。を。劫。火。を。と。く。燒。殺。し。ぬ。され
 ども。彼。二。門。猶。非。を。改。む。る。事。な。ら。ず。也。苛。政。倍。加。り。奢。移。弥。長。せ。り。故。小
 園。々。の。武。士。怨。と。背。を。く。兵。亂。を。起。し。四。海。の。蒼。生。を。塗。炭。灰。小。陷。皆。是。平。家。の
 驕。奢。より。起。る。ふ。あ。ら。ま。と。て。何。ぞ。や。然。る。小。桓。武。帝。の。嫡。孫。と。る。法。皇。御。親。子。の
 義。を。思。ふ。と。其。廢。流。し。る。平。家。小。与。ま。る。ハ。本。成。捨。末。成。取。小。あ。ら。ま。と。や。む。木。曾
 義。仲。ハ。當。山。小。好。ま。る。と。い。ふ。も。高。倉。宮。の。令。旨。を。天。に。一。四。乃。官。を。守。傳。て。義。戰



の動靜は度合と処ふ。北國勢山門をさへひき登山し。今中の都へ攻下る
 べし。勢ひかるとは。一門の周障大なるをさへ急た緒手ろ身方分呼返し
 防戦の備小當人と早馬をさる事。擲の齒を挽がごとく。是亦依と薩の
 守忠度左馬頭行盛と淀より引返し。新三位資盛は免道より都へ飯り。本
 三位重衡能登守教経山階より引返さる。新中納言知盛は独五百余騎
 ゆく勢田より出張有るが引返る。急使を申徐々と引返る。栗津
 が原一夜宿陣ある。茲小加賀團の住人大田次郎倉光三郎兩人五百余騎
 ゆく木曾殿の手へ馳加んと後地小きり。勢田を廻り上る。処小。木曾
 殿と天台山へ登りむり。と史然とて二井寺より志賀唐崎を歴て東
 坂本に至り。林富樫と一手小かんと。勢田の長橋あり。栗津が原と通
 る小。知盛の兵も早く見答何者かを平家の大將軍の御陣前も不悋
 無あまると。敵う身方ろ各々かのり下馬して通れと。叱りたる大田倉

光儲は平家の陣小や名称とて。悪うり。急小馬分曳返し。方田の播
 板二三回引落し。建部社の此方陣成とる。知盛は其体を刃を。敵をればと
 名のて引返し。め。哀とる小。不知案内の北國勢を。一當あて。蹴り
 下知せられ。逆雄の者とも承り。五百余騎一移小。進む。敵早
 く搦を引られ。栗津の浦より船小を乗東濱小。漕りて勢田の在家
 小。火をけ。喊を造り。攻進む。北國勢も待殺し。事を。箭尻を揃り。射合た
 り。世二日の夜半より。乃事を。下弦の月へ。出ると。火の光り。昼の
 しく。かろ。雨勢是。力小。挑。平家の方小。進。藤滝口。俊方と。著
 真魁小。進。敵三騎斬り。落し。四五騎小。手。負せ。北國勢。其。舊。勇。小
 恐怖し。人を。調。引。平軍。得。と。移。小。切。進。當。幸。小。難。と。て
 たり。是亦依。大田次郎兼定。嫡子。入江冠者親定。を。名。ある。武。士。十
 八人。軍。兵。六十。余人。討。大田倉光。大。怒。り。自己。真。先。小。群。敵。と。切

いづひ縦横の蒐まらば従卒是れ又足並を整して殺至るまで
 追は返して四五度戦ひ終り平家お負う進軍滝口を先侍十人
 士卒百四五十人死せし引退く北園勢も手負討死すかた敵の引を
 一面月より引退れ本陣へ取り多ゆ知盛危厲を免れ終夜都へ歸り
 法皇暗渡御山門條

京洛の右大臣宗盛未曾勢今中山よりきて下る事とやと安死心もなく
 足成をいそぐ諸方の身方の引及を成待き多ゆ廿四日の明方新中納言
 知盛の一手勢田の軍小方負上下朱小成と取り多れを弥恐怖のかりひと
 増一門を集り再度高議せし身方新中敗して不勢なる小山門
 の大衆未曾小方力として下り落し丹々加之大和丹波兩道より敵徒
 攻上る所詮小勢ゆく防だ得ずとも思われ列位武道の耻を思
 都城ゆく右も左もかたんとやさうハ潔く流る小主上上皇女院など

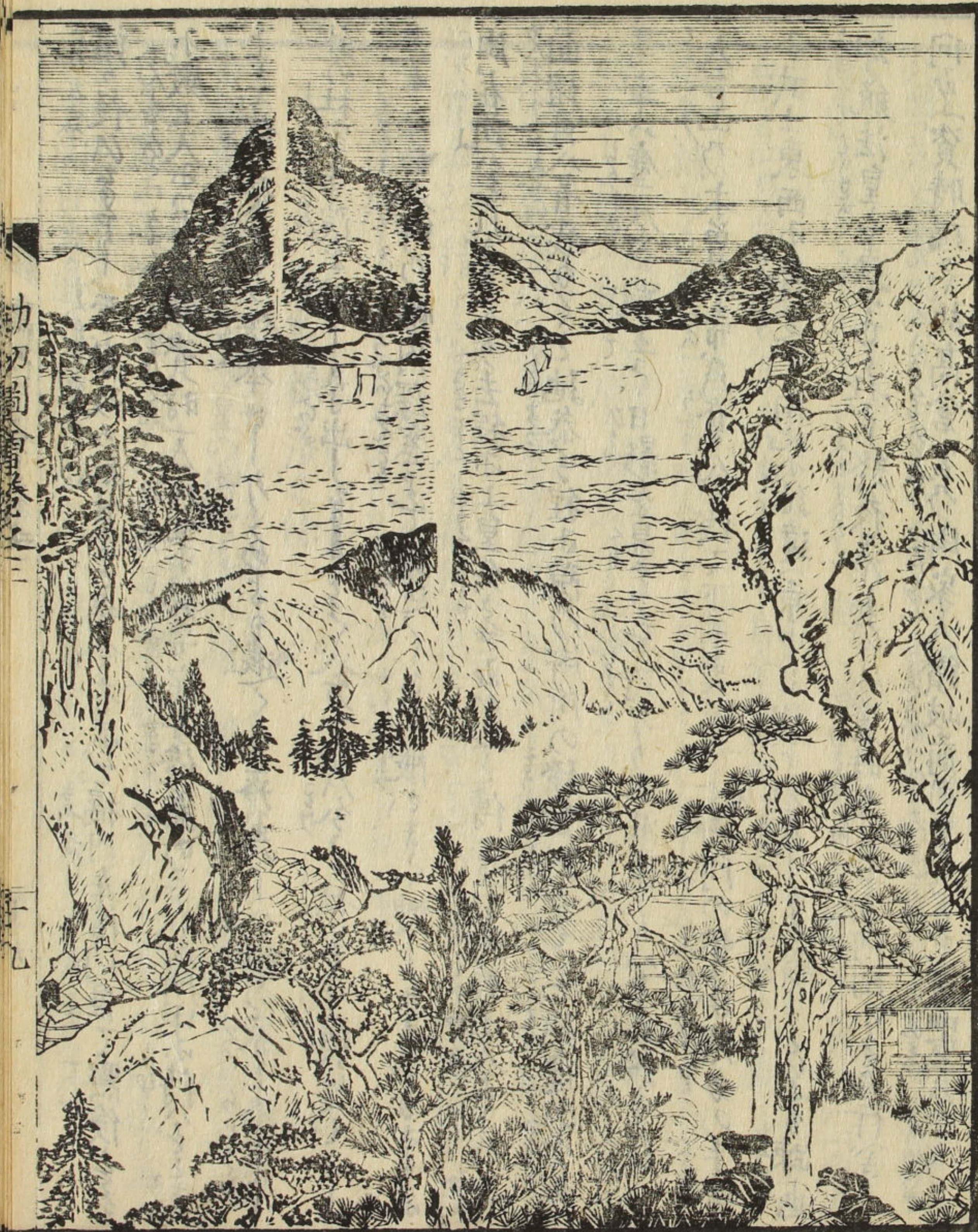
小島苦みかたせも人も其恐あり且身方今勢ひ衰へれば猶四圍九列の
 多年思顧の将卒元満され且つ忝辱な忍び主上法皇女院を供奉
 西園閑た敵の末鏡を遊軍馬戎調へ飯洛を催まし源氏を追落し
 更安らざるごとくされれば是れ同意する人半小過り知盛忠度教経以
 下耻を知する人言申受たりとかりひも一門の棟梁なる宗盛の約を再度
 破ん我意も募る小當り且洛中無勢ゆく諸方の敵を防人更能はれん
 終り宗盛の意はどほり宗盛斜なす悦びさる法皇女院小其昔啓
 せんとも其日の小夜更る頃建礼門院の御符忍んで奉候しやされふと
 北園の遷後都へ攻近げさせの中強しういむ主上法皇まらとも一旦筑
 紫の方へ供奉しとも凶徒を追拂ひ後再度還幸なりとも人其
 御準備いと教命ある小女院御泪を潜然と流しぬ免ぬ角ゆ然る
 死せりともせよ去りいさむ幼稚聖主乃住別花の都を振捨る

心筑紫の浪の上八重の汐路の夏旅の漂泊む久吏の痛りさよ志賀の山
 路の花の春大樞の川辺に紅葉の秋假初乃御遊の旅寐ときけむ物憂
 ふのはろろもち浪のそともろぬ管船小明暮さむいらさるふ心細く
 思君らん御衣の袖に御負小宛とと許小泣伏せ右大臣御心中に推量
 俱小衣紋の袂を絞りながら言葉を書き百端小練ららる頃之水無月廿四日
 の夜半をれを曉まで出る月大内山を幽小照の清水きつ五更の鐘雲井の空
 小気疎く響く何妻小付ても女院と御袖をひち増りたる且筑前司重
 秀ハ木曾殿の奉意を承院の北面民部丞光貞を以前莫逆の朋とせ深が
 行(忍心)行対面と別後の素情を述借ヤ々々平家止余年の積悪報ひ
 まり諸國皆恨と疑き源氏小頼ひ麻小より門の勢ひ究り就中木曾殿の
 勇銳小拉がれ今小浴中お主人事叶む暗小西園(拔落せん)の準備頗かり
 とれ小就く主上上皇を由西園(遷)せんとせ金し主上ハ清盛の孫をれ

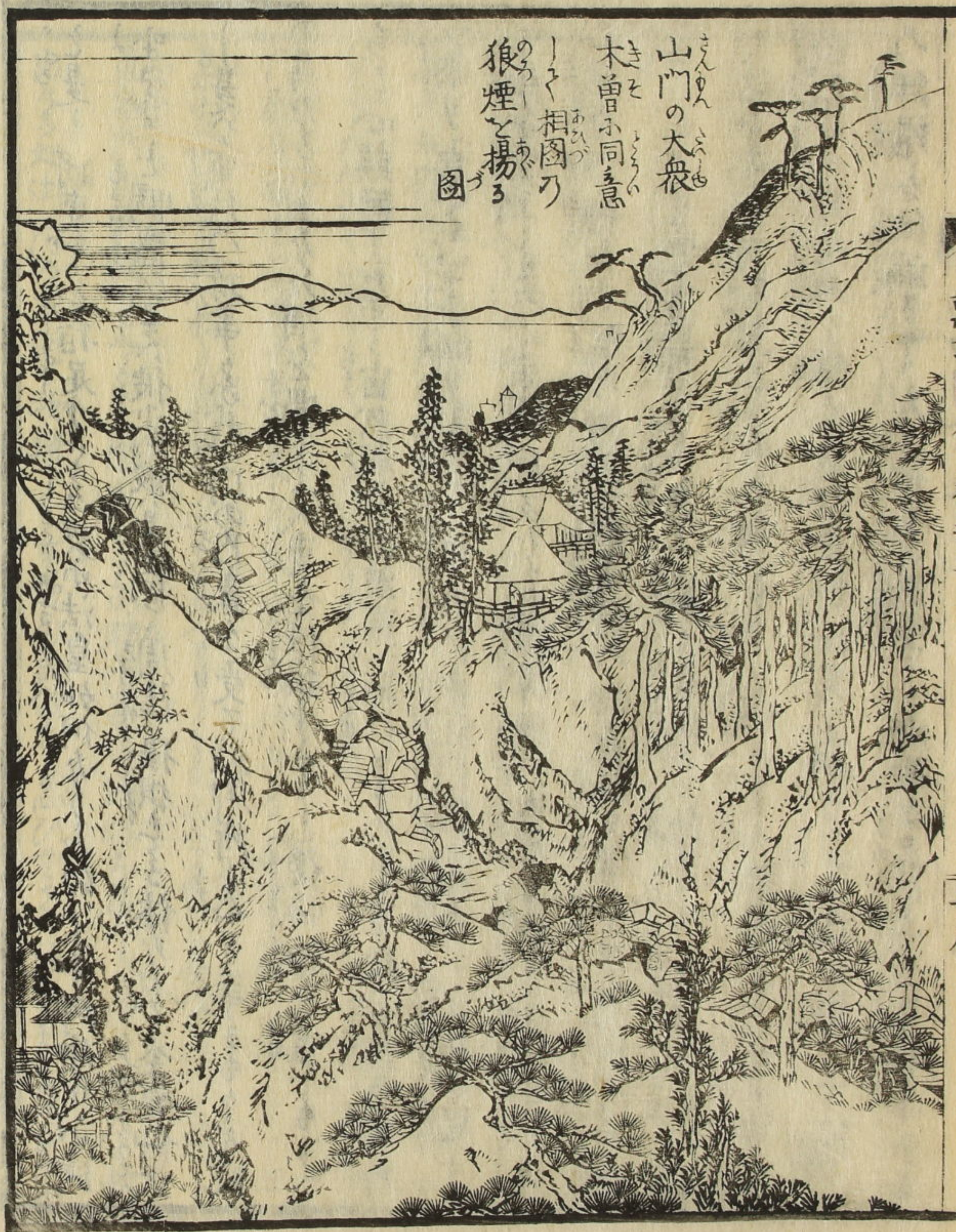
力なり院ハ皇子達乃為ゆ御身の為ゆ悲敵と平家の為小捕まて西
 園(赴)死む長く彼方乃人質となり御生涯を憂苦の中お過さむあを
 御辺忠義の心あむ片時も早く院を落しなり其快難を救ひ進せよと
 中をれ俊兼大のふおと若足下の教ふあむむんを君を水火の中(陥)ま
 ふ座し是去りたが天照皇大神足下成以く託しゆなれ諸何困(みせ
 ちまつ死)同重秀が白他の所(落)せらへ平家草成をゆ尋出しなりト
 唯鞍馬路より山門(行)幸なりまらむ平家如何ありやも捕まら更能す
 俊兼尤と曰し半等成定ま重秀成飯し取物ゆとりあむと竊小院の御
 座乃白破小跪を奏しまら死御更いと折よく院唯御一人あ御前侍
 ら女房達ゆなれ何更と問せゆ俊兼小音あむさん源氏四方上
 京都(攻)迫著い小依て平家京洛小安堵し三種の神馬九重乃御
 成枕なり主上女院并び小君成も供奉し西園(閑)人内々其支度仕り早

何困なつなりとも落おちさせぬと奏そうと院いんこころ小發こほつうせぬ斯この有ありしとを
 兼かねさかりし事ことよ神かみ奴やつも早く知しせうふ此この更また努う々々人ひとも漏もれしと只ただ資すけ時とき許ゆる
 小知ちせぬ與よ然ぜん用意よういして裏うら門かど小待まてよと命いのちしぬ俊とよ兼かね領りやう掌て白しろ砂すなを退ひく
 殿との上人じやうじん右馬頭みぎうまがしら資すけ時とき小對面こたいめん機き蜜みつを結むすり合あせ其身そのみ行ゆ北きた面めんの定さだ安やす
 知ち女にの三さん人にんの者ものと俱とも小竊こせう小御こみ與よを死しとて法はふ住じゆ寺じ殿でんの裏うら門かど小忍こしのひ資すけ
 時とき相あ因いん今いまや待まち知ち時ときむり有あり資すけ時とき院いん小女房こにようばうの衣きぬ成なり著せき薄うす衣ぎ被かせむり
 其身そのみ由よし符ふ衣ぎの上のうへ薄うす衣ぎ被かれ出で来きりぬ俊とよ兼かね以下いげ待まち緒いと君きみ成なり與よ小兼よせせ
 むりの恥はぢをかく鞍くら馬まをさりて馳せ行ゆ々々をあつ者ものさふなかりりの茲こゝ小竊こせう内うち左ひだり工たくら
 門かど尉ゑう季き安やすとの者ものあり原はら来きた平へい家け無な二に侍さむらひたる院いん中ちゆうの隱いん因いん附つけて王わう
 素す小こ法はふ住じゆ寺じ殿でん忝かたじけなく院いんゆめ近ちかく事ことへなり々々を今いま宵よを宵よ小酒こさけを過すて
 直ちやく宿しゆく所しよ小前こまへ後ごゆちとの醉よめ則すなはち小曉こあき頃ころ小不ふ因いん眼がんを覚さる湯ゆを飲のみんと起た
 出で々々を御ご所しよの方かた何なに物もの強つよく女房にようばうの声こゑゆゝ忍しのびひ中ちゆう小泣こなみ々々をひ皮かわぬる小

を是この何なに更またごと指さ足あししと立た皮かわ小法はふ皇こう如何いかなりぬの小御こみ所しよ中ちゆう小御こみ
 坐まさずと惆あは惑れひ是この彼かれ小向こむか彼かれ是この同どうく周まわ障さう狼ろう狽だとの体ていなれと季き安やす仰おほ大
 一ひと是この希き代だい乃の祿りやく事ことも我われ一ひと門かどの内うち意いを受うて此この御ご所しよ忝かたじけなく事こともの々々を時
 の為ためなる小由よし乃の死し酒さけを過すて大おほ更またを仕し損とんどのりと後悔こうかい胸むねを嚙くはむる
 らの心こゝろ顛てん轉てん一ひと乃の由よし然ぜん起たぶ六む波は羅ら馳せ行ゆ々々を小右こみぎ大臣だいじん殿でん乃の御ご所しよ
 忝かたじけなく事こともの々々を飯いひりぬととの度たぎ其その終すまひ建た礼れい門かど院いん推おし忝かたじけなく事こともの々々を宗むね盛さか小湯ゆ
 子こ細こを言い上かみしぬれと宗むね盛さか仰おほ及およむり周まわ障さう強つよ衣ぎ冠かんを刷はらぬ隙ひまもたく馬
 小兼よせ混ま鞭むちち乃の御ご所しよ馳せ著せき院いん乃の御ご身み近ちかく使つかせぬ丹に後ご局きやうを始は
 有ありとある女房にようばう上じやう達たつ部ぶを召めい集じふとの嚴げんく責せき問もんもの維い有ありと知ち者ものなり唯ただち伏
 て泣なむるりなり兎う角かくとの内うち小夜こよとの明あけぬり六む波は羅らよりの薩さつ守しゆ忠ちゆう
 度た越こ中ちゆう二に郎らう盛さか嗣しを將まさとの法はふ住じゆ寺じ殿でん馳せ著せき子こ細こを皮かわとの眉まゆを擗ひちぬり門かど内うち
 乃の評ひやう議ぎと他た漏もれるやなり何なに更またの御ご坐まてる御ご所しよを忍しのびひ出でぬる供く奉ほう小こと



力の闘合



山門の大衆
木曾の同意
狼煙と揚る
相図の
図

鳥工

公卿殿上人追々影が隠し在京の武士も抜々分國へ逃散るふど。二門の輩
 弥周障し。此上二時も早く都が落んと。主上女院が車に乗せり神璽宝
 劍内待所へ唐櫃の小伎を空輦の從ひ出せし。平大納言時忠殿上人等
 小令一印鑑時の簡を丸九重乃御宝二品も取落と。くもと下されし。皆
 皆人周障りて我先おと落度。これを取落と物と多り。時長壽寺永
 二年七月十五日空輦が促し七条が西へ朱雀が南へ行幸なり。供奉のハ
 内大臣宗盛父子平大納言時忠藏人頭基信以上衣冠中供奉を平中納言範
 盛新中納言知盛修理太輔経盛右衛門督清宗本三位中将維盛新三位中
 將資盛越前三位通盛續岐中将時実左中将清経日有盛丹波侍從忠房
 皇后亮経政無官太夫敦盛左馬頭行盛薩守忠度能登守教経其外
 公卿殿上人檢非違使侍府緒司八省紀と。ふ違あは。只池大納言頼盛
 のと都小残。仁和寺常盤殿が潜る隠し居られり。是は故池禪尼頼

朝が虜と成り成隣と死罪が宥られ思義が母の鎌倉殿より頼盛の方へ
 二門のより。離れ鎌倉へ下向あは。安堵の地が与へ。内々中送
 らま。ふより。斯供奉の敷漏られり。と。これ。諸人其命が惜。二門を
 見捨。成不義。吐唾して。斯。平家都が出れ。金玉が鏤。免
 花嚴を盡せ。宮殿樓閣。止四ヶ所。火をうけて。焼立。其。余。煙。京。白。河。へ。を
 在家五百有余。二時。小。灰。燼。と。成。小。り。漢。楚。暴。秦。を。亡。し。威。陽。宮。が。焼。し。そ
 小。斯。や。と。許。小。食。ま。なり。二門の。人。々。を。泣。く。是。を。他。所。小。見。な。し。任。列。一。花。の。都
 大。振。捨。く。夢。路。を。た。ご。心。地。一。あ。く。山。崎。の。関。戸。の。宿。著。是。より。御。船。を。あ。り
 ら。ひ。主。上。女。院。を。乗。進。せ。二。門。の。め。供。奉。の。勢。七。千。余。人。或。福。原。へ。陸。より。下。る
 と。あり。或。八。船。小。乗。主。上。を。守。護。さ。る。有。心。々。小。撰。列。福。原。へ。下。著。と。當
 所。ハ。故。大。政。入。道。さ。り。由。百。五。乃。手。が。盡。す。万。宝。を。抛。く。造。營。々。れ。も。没。後。ハ。兵。亂
 赤。續。た。八。住。さ。る。更。三。年。小。お。ひ。れ。を。部。破。是。格。子。洛。御。簾。も。と。れ。も

ちだき散庭と蓬生の叢となりてさかろく狐の卧所のごく瓦小松桂掩ひ茂
 すとね小鼻の柄となれり。二門の人々此光景を忍る小付ても運乃末浅猿く
 袖小余さる泪乃露路上の露小争へ中あも二位乃得尼ハ丁不小怒ミミ
 故入道相國も此所をこそ老樂の慰め所と愛しあてされを魂魄も此所小や
 苗りふらめ今夜むりの余波小管絃講を催して亡靈吊つまろしとあそ
 小ぞ人々実中とそ其夜ハ綠竹乃後を定え終夜吹彈誦經し相國の靈と
 と慰めさる者其夜も明行なれ又中人々船小とり兼福原の殿閣ハ大をなけ
 て焼上まむ黒煙紅天を曇せ殿宇一朝小白灰となりぬ平家ハ是成背小見
 と泣き繩をとれ八重の汐路乃浪をこけ滄海杳杳漕出せむ伊弉諾の天
 雲小都の方乃山の端も刃えむと鳴尾乃狐套とあそと許問捨く釣乃小船の
 浮流と定めなれ世へくころ阿波の鳴門小浪乃渡苦一とあ歎死一葉
 万里乃海原小明暮とてよふく小筑前國太宰府小著安樂寺成伎の皇

居と定め。二門軍議小肝膽成確く折しあそ豊後國の住人緒方三郎惟義と
 の者國司頼経乃命令を結戸槻白杵松原ホカとそ平家成代人と催しとせ
 度へこれむ平家の人々大小船と死太宰府も住居しと。又船小乗て豊之則
 國押か浦漕渡り。宇佐宮へ参詣ありと社頭を皇居しと末々乃官人雜兵ハ
 大率表小侯トとり當社小七日参籠あり。王上乃帝運用成再度京洛へ
 還幸有命死折りのと。神馬七疋其外財施法施成なる。されども何乃
 御告もなりとれむ。内大臣宗盛
 ありひらの心はくし小折まじもうさ小ハ物もつとれさりと
 と口もなまきとる小ハ幡宮忽ち巫女小うは里すとて一首の歌成託しあふ
 世乃中のうさ小ハ神もを死もの死心はくし何ののさる人
 内大臣もち二門乃人々此神詠を定む。頼も綱も切景し心地し。偕ハ神明
 佛陀も見捨成運の末こそ悲しとれ。列位途方小昏多小。ささも緒方三

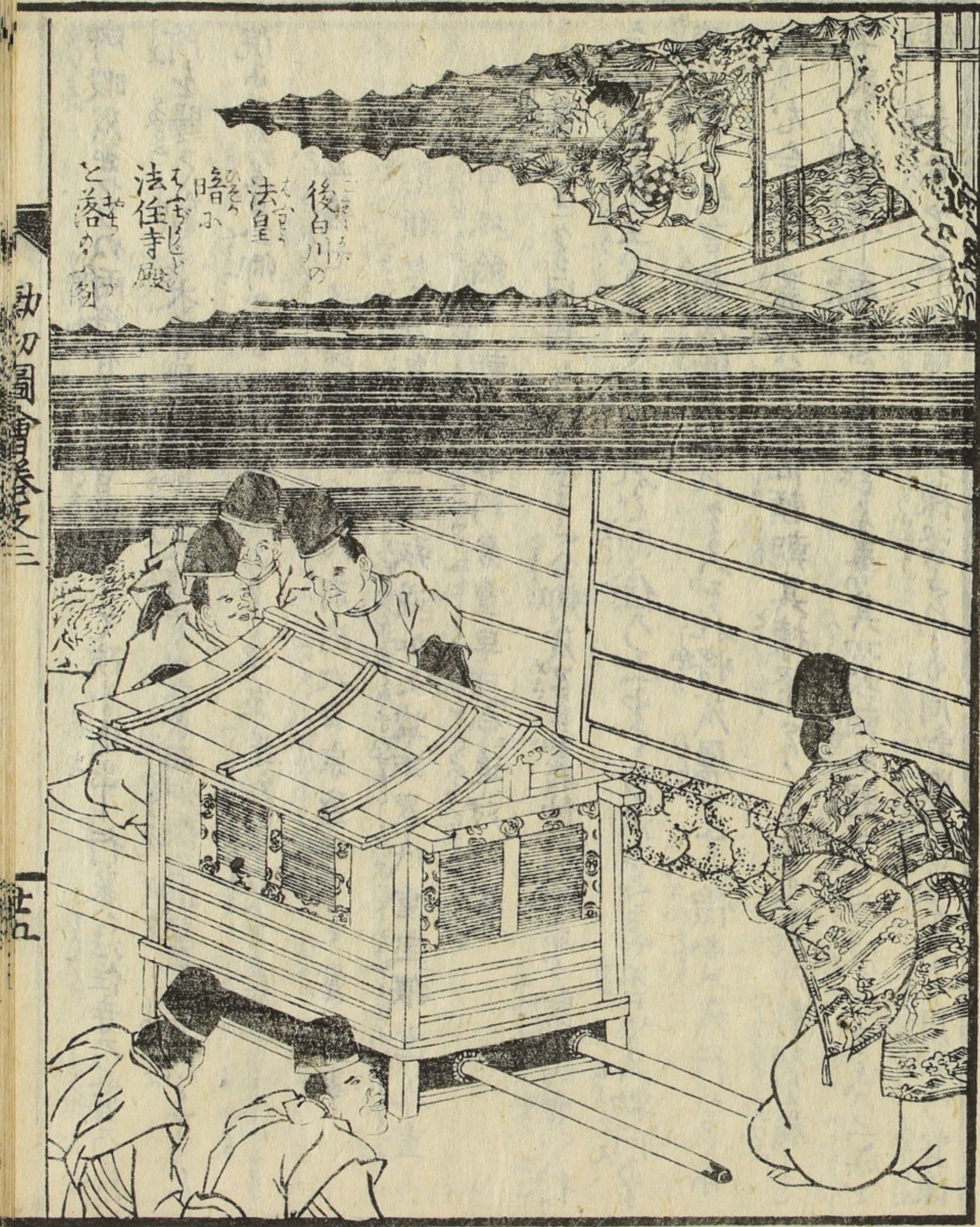
即亦押寄ると云ふに六周障すといひて衆人延置小舟より乗柁が浦と漕
出る左中将清経を神託を深く憂ひ今世中斯くもあられ久し月清く暗
く夜独り船の舳先へ立出念佛十遍をうり唱へ水中へ身投底の水屑
と成ふなり。夜明く後人々是れ知いと悲歎の袖をひくく多處長門國乃目
代紀民部大輔光季捨物船百三十余艘をまりをわたりカ成得是れ取乗
て四國路漕上り濱岐國八嶋小著されども當所ハ藻塩焼賤う家屠漁捕と
ふ延置か庵のミかれむ皇居ととて死家もなく御座船を具供皇居と。是を
船の御所ととや多る。其後菊地大夫禮益河波國より材木を切出八嶋小
内裏成建主上成入も公卿の家ゆ女を造管とをれ。一門の輩女ハ女堵
乃みかひをなへ還都の軍議を廻ると中阿波民部成能一千騎あて馳奉り
君成守護一々れ弥氣を整一稍悦びの色成と表一とる

法皇還都 義仲行家受領條

却説一院ハ山門へ渡御なつて都の動靜成せむふ案つて平家の一門主
上女院を供奉三種の神蓋成守護して。都成閉死西園へ落し由成なれ
む一度ハ其禍をなぬ多し成悦び一度ハ神寶の扁鄙小遷り成歎たると
深く慮成困む多し御商議なりとて公卿一人も参り玉がれを詮方を
く思召多る小木曾殿の多るいふと浴中浴外小人を池法皇ハ山門へ渡御し
東塔南谷圓融房小御座とて天忠成あり公卿登山して守護し一と觸
りてこれ多るふと此所彼處ハ隱潜む人々大い悦び入道前関白松殿を
拱政内大臣基通公左大臣經宗右大臣兼実以下。大中納言宰相三位四位
五位の公卿殿上入上下の北面より追我りくと聲岳小池泰一院成守護し
なる程小圓融房の堂上堂下門内門外も元満より法皇大い力成好む
ハ此人々と神蓋還幸の御商議をせむせむ人多し。日廿七日小新宮十郎藏
人行家伊賀より伐り登り木幡伏見を徑り京師へ入り史下く小木曾殿也

さうむ此手も都へ入りしとて山門城下を洋と湖を押さうり頼田を渡して都
 へ入れしを山門より西坂本城下まで都へ入道なれども初めの都へ入
 成往人と君子の志所とて斯道成廻り順路を徑ぐ都へ入せしむるなり日
 廿八日法皇も還御ある近江源氏の中錦織冠者義廣白旗をきて先陣
 公卿殿上人室輩成守護し山門の大衆後陣を拘へ蓮華王院の御所へ
 入るる保元以後二十余年の間歩絶し白旗再度都へ入るる成君も臣も
 珎くと思されたる廿九日小義仲行家院の御所へ参候と義仲赤地錦の
 直垂小紫威の甲小襪金物歩る成著し折鳥帽子歩被死金造の太又津菟
 の矢筒負花中歩鎧も即黨五人童子一人を相具せしる人品といひ歩拾と
 天晴大將軍中より人自然おろせり行家細小縫物も直垂小崩黄白
 の甲成著し立鳥帽子成著る銀造の太刀佩郎黨五人を相具せり是中事
 柄勇々く刀をなかり治承の其畏ふ大事成洩して高倉官成り免源三條

頼政一家成亡しとて不覺人となり自然をいめて咄継人となりしとて
 踞しをれ法皇御氣色麗しく檢非違使の別當左衛門督實家成りて倫
 命有る平相國清盛櫻小朝權成檀小く王道成錯乱し門の輦驕奢
 成専小く萬民を虐し小汝達義兵を起し平族を攻落せし奈神妙なり
 然る小彼輩幼帝をび小三種の神蓋成りて西國へ下りぬ神武天皇より
 帝王今代の向ふる例を死成更なり汝達忠戦を成平家成誅伐して神
 聖事故成く還御たりしとて下りたり木曾殿低頭しとて勅答されしとて義
 仲不肖の身成りて故高倉官の令旨成頭小戴死天威を借し強敵を伐
 靡けし小更偏小君徳の灼然成りて敢て微臣ホグ切ら及小知小い手
 以後とて小命成辱し身命成極く逆後成平夷主上神蓋も小還御か
 一も人事方すの内小いと奏せし法皇御感斜かると當坐小儉賞の御汝
 沐有つ死あまじと天下いし帝王なれ追天子受禪の上除目行はるべし



助刀圖會卷之三

廿二



無刀圖會卷之三

廿三

御暇あひまはまりぬ。丙持のちり有ある。首回おもひまわ奏まうして院を退出しりぞ。行家あちり法住ほつじゆ寺てらの萱あや乃の御所ごしよを賜たまふ。宿しゆく。木曾殿きそとの大膳おほの大夫だふ信業のぶが六条西洞院ろくじやうせいどういんの別業わかづが宿所しゆくしよとせし。院いんは其その翌日あつち公卿こうけい成なり石いしを御評議ごへいぎあり。平家追討へいけあひうの下文したげを五畿七道ごきしちどう回めぐらる。

五畿七道ごきしちどう諸國しよこく可べ追討あひう前内大臣まへうちじん宗盛むねもり以下以下之の黨類とうるい事こと

件けん黨類とうるい忽たち背そむ皇化こうか已や企こ叛逆たひやく加之た盜取たうとく累代るいだい車宝くるあほう撰出せんしゆ九重くじゆう

之の都みやこ城しろ綸りん之の朝あさ章あきら罪科つみか身重みぢゆう早はや可べ令し追討あひう件けん黨とう

とと載のらる。日朔にっしやく日にち法皇ほつこうまま公卿こうけい召よ召よ義仲行家ぎちゆうあちりホホ勳功くんこうの賞あはと行い

る。帝てい王おうの定さだままる。即すな位ゐの上の上の中ちゆう汝汰にょたいまま不ふ口くちや成なり勅問ちやくもんあり。

梅小路中納言うめのみちのちゆうなごんごんごん長房ちやうぼう卿けい中ちゆうされ。將しやう成なり屬ぞく中ちゆう八はち儉賞けんじやう成なり行いらる。小こ

あり。尤なほ今般こんぱん乃の義兵ぎへい兵へい傷やう佐さ頼朝よりちゆう其その棟梁とうりやうととり。義仲ぎちゆう戦功せんこうを屬ぞくと

平家成追落へいけなりあひう一いつ層そう慮りよを安人やすびととと事こと其その功こう頼朝よりちゆう不ふ超ちゆうととり。昔漢朝むかしかんちゆう呂氏りし乃の一族いちよくと

殊こと一いつ文帝ぶんていを立たて一いつ阿陳あちん平へい其その棟梁とうりやうととり。周勃しゆうはく戦功せんこうある。小こより周勃しゆうはくの賞あは陳ちん

平へい小超こしゆうより我朝われちゆう承平じやうへいの將門しやうもん叛逆はんぎやくの阿上あかう平へい太直盛たうぢきゆう追討あひう乃の大將軍だいしやうじんととり。小こ

後原秀卿ごへんしゆけい乃の功こう大だいを立たて。八はち儉賞けんじやう貞盛ていせい不ふ超ちゆうととり。者ものは先行家さきあちり義仲ぎちゆう小忠賞こちゆうじやうの御

汝汰にょたいあある。人を維いく。儼げんととり。帝てい王おうの定さだままる。成なり待まちか。諸軍しよぐん乃の勇

氣き強きやうととり。平家追伐へいけあひうを屬ぞくむ。意い自じ然ぜん薄はくととり。死しににおおととり。満座まんざ乃の卿相けいしやう

其その論ろんは伏ふく長房ちやうぼうの議論ぎろんととり。二に容ゆるみみ奏そうせ。北きた院いんは衆議しゆぎ一致いちじ乃のととり。

行家あちり義仲ぎちゆう召よ召よ行家あちり備前守べんぜんしゆ義仲ぎちゆう左馬頭さまのうし不ふ任にんととり。儲たくら平家へいけ没官ぼつくわん乃の地

五百余いほひヶ所ところの内うち。義仲ぎちゆうは百四十ひやくしじゆう余あまりヶ所ところを賜たまふ。行家あちりは七十しちじゆうヶ所ところ成なり行いらる。兩

將しやう謹きんととり。君恩きみおん成なり謝しやととり。退たい出しゆととり。元來もとより腹黒はらくろなる。十じゆ即すな行家あちり。其その身み乃の勳功くんこう

乃の成なり不ふ顧こ義仲ぎちゆう不ふ所領しよりやう君きみ乃の寄よせ。成なり深ふかく憤いらいり。是こゝより木曾きそ諺ことわざととり

自滅じめつさせ。心こゝろ萌もととり。薄情はくじやうなる。四し宮みや御受ごうけ禪ぜん并なら行家あちり知安ちやす諺ことわざ奏そう條じょう

斯かくく院いんは天下てんか一日いつにち由よし帝てい王おうななくくて叶かなふ。十じゆ善ぜんの至いた成なり定さだままる。ととり。諸卿しよけいを召よ

先帝の四宮王位を嗣せんと先王従大の御尊是八如何と桐景一々木曾殿
 八堪ふ大倉卿泰經朝臣小就く奏せしる今度北陸道乃兵義成金石の
 重た北比の命我毫毛の輕た小准強敵を攻靡し。管虐成安人なること
 偏小高倉宮の令旨成頂に彼宮の御吊軍とこそおかりひ。然ふに臣等がす
 功皆故高倉宮の御方たり。然るに北陸宮とて帝位小即せむ。金元先帝
 の四宮御位小即せむ事。心あがる。管虐足がら。如何とや。法皇春宮の御後
 荒僧正成とほく義仲へ仰及され。義仲の一條一焦其細か。如何とや。と
 どの我皇國の方より帝位の更ハ継射守文を先。如何とや。事。如何とや。朕が為小
 ハ先帝の高倉宮の中の子方れ。如何とや。何方小疎なり。但嫡成。置と王法の疑
 とし。如何とや。皇太神宮の神慮小任せ帝位成定り。義仲不平の懷を翻
 猶中忠戦を屬と神蓋成還幸なり。身之身成遂。如何とや。仰下さる
 木曾殿蓮く承り。諸僧上小向ひ。帝王御即位乃御大事。其等。如何とや。木曾殿の

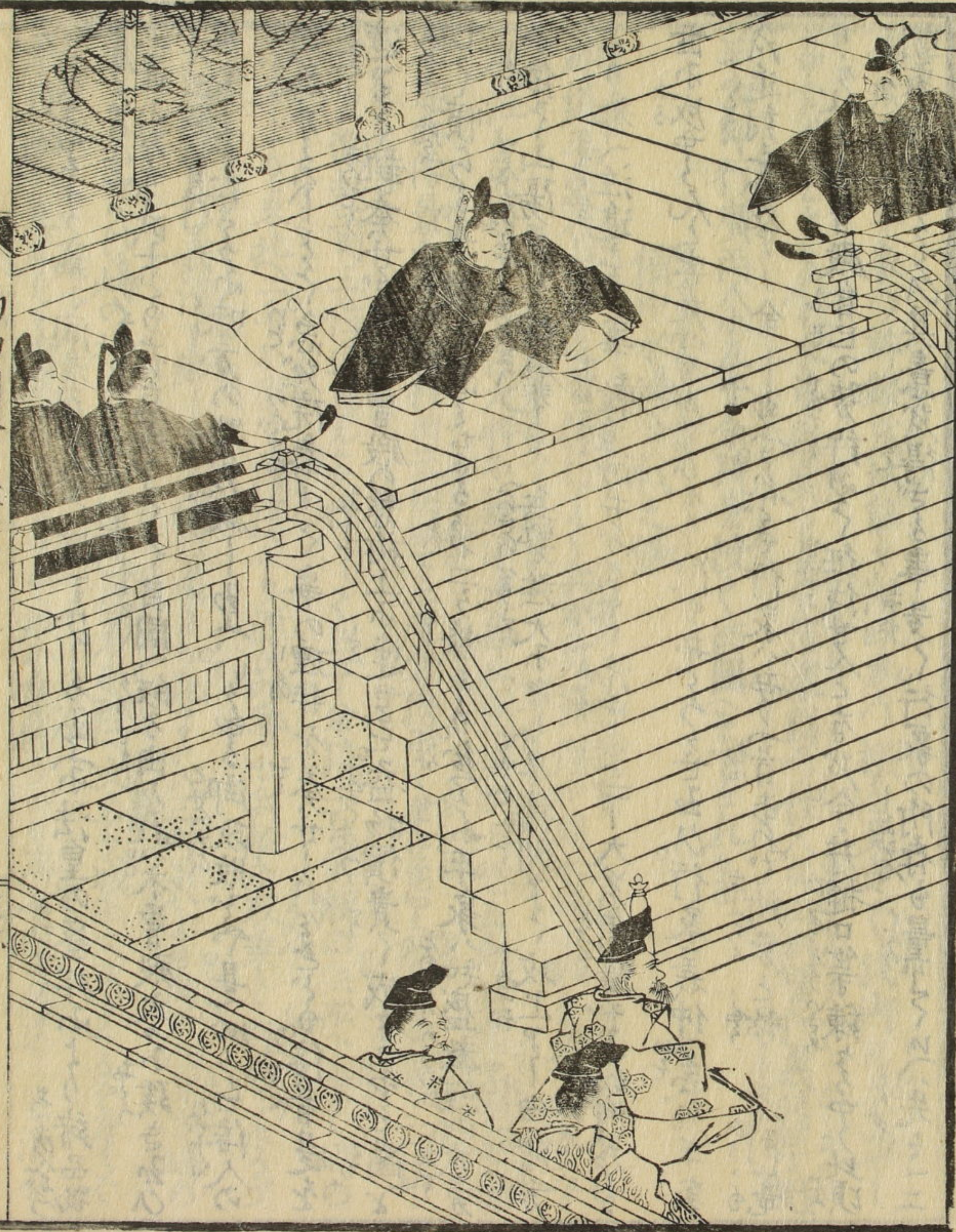
民の口入し。如何とや。事の理を考。如何とや。法皇既小清盛が為小鳥羽
 の離宮。押せ置られ。如何とや。新院ハ平家の權威小恐き。如何とや。將内縁と思
 召る。如何とや。思。如何とや。是。如何とや。不孝なり。高倉宮。如何とや。法皇の御爵
 憤成。如何とや。慰。如何とや。甲。如何とや。大義を思召。如何とや。諸國乃源氏。如何とや。令旨成廻
 其。如何とや。義戦の為小御。如何とや。令旨成落。如何とや。其。如何とや。普。如何とや。天下の
 其。如何とや。御孝心成愛。如何とや。北陸宮小御位成勸。如何とや。正理。如何とや。唯嫡庶の義小泥
 孝成捨。如何とや。不孝成取。如何とや。天下の民小不孝成教。如何とや。不孝成御。如何とや。難。如何とや。御
 俊。如何とや。元理。如何とや。責。如何とや。られ。如何とや。亦。如何とや。これ。如何とや。御。如何とや。官。如何とや。平家成亡。如何とや。御孝
 心。如何とや。か。如何とや。と。如何とや。時。如何とや。勢。如何とや。成。如何とや。計。如何とや。と。如何とや。猥。如何とや。小。如何とや。事。如何とや。成。如何とや。毀。如何とや。御身。如何とや。を。如何とや。亡。如何とや。大政。如何とや。入。如何とや。道。如何とや。の。如何とや。暴。如何とや。惡
 小。如何とや。培。如何とや。再。如何とや。度。如何とや。法。如何とや。皇。如何とや。成。如何とや。押。如何とや。置。如何とや。或。如何とや。都。如何とや。成。如何とや。福。如何とや。原。如何とや。遷。如何とや。せ。如何とや。彼。如何とや。官。如何とや。御。如何とや。謀。如何とや。叛。如何とや。の。如何とや。故。如何とや。起。如何とや。り。如何とや。ぬ
 如何とや。御。如何とや。孝。如何とや。心。如何とや。却。如何とや。御。如何とや。不。如何とや。孝。如何とや。と。如何とや。な。如何とや。れ。如何とや。此。如何とや。可。如何とや。否。如何とや。と。如何とや。置。如何とや。北。如何とや。陸。如何とや。宮。如何とや。乃。如何とや。御。如何とや。こと。如何とや。ハ
 一旦得道。如何とや。と。如何とや。還。如何とや。俗。如何とや。の人。如何とや。乃。如何とや。帝。如何とや。位。如何とや。を。如何とや。踐。如何とや。か。如何とや。ん。如何とや。如何とや。何。如何とや。あ。如何とや。ん。如何とや。一。如何とや。坐。如何とや。の。如何とや。列。如何とや。卿。如何とや。傾。如何とや。き。如何とや。ヤ

さしおれども院も高倉宮の御孝心貴辺乃忠義我思し。北陸宮成り捨て思
 煩せむの所詮神慮小任せんとして伊勢兩宮成勸請ありて。神前小御廬を取
 て王位を定めおひかれむ何事も神明の御まうらひと思さるべしと審りらる
 木曾殿女一気色を娶てすれども神慮御廬の上といふをカヤむと但し
 福原遷都の事ハ清盛が多年深く巧み致し隠謀あり宮乃御企ゆといふ言ふ
 一。亦遷俗の宮乃却即位先蹤なりといふ如何ぞや。已小天武天皇ハ大友皇子の難と
 避る春宮の位を退た大佛殿ふへ御出家有らうども。後小大友皇子を亡
 しく海位小即おの老謙天皇由一且得道しむいらくども。大炊天皇ハ廢しそ
 重祚ある唐土小則天皇皇后尼と成り感業寺ふ介うども。再度高宗乃后と
 かり高宗崩御乃後位を踐る天下の王なり。是亦皆昔史小記しむを争ら
 北陸宮小限り議論いやと仰さるあむ。俊亮今ハ返を詞なり。然るハ歸りそ
 法皇小再度啓奏し侍んそ退しられども。其後何の御汝汰ゆらそ

御位と弥弟四乃宮小定より多小。木曾殿大い力を落され深く法皇と
 怨まざる。北陸宮ハ多年の御望も水上の泡と消るを。世に憂も小女なし
 召媛岷野の真小引篋幽なる庵小行ひとる。世の人是を野依官とと
 称し多然る小十郎行家。木曾が法皇我恨をなるとり。成り出。須波究竟
 の事こそ出きしれと悦ひ。入魂なる院の御内人壹岐判官知安といふ者
 小中々ハ今般帝王御定の議小付。義仲深く法皇我恨をなるとり。内々隠謀の企
 あり構る御油断有らう。彼義仲ハ某が姪ふ。二才の時より木曾乃山
 奥小言ち人倫の道成り弁ぬ。不骨者ゆ。唯我依小奉動入。平家乃繫
 昌然美決る自己も天子乃外叔と成。栄花を究めなるとかり。最中。高倉宮一り
 令旨成得大い悦ひ表と宮乃令旨といひ。内心と宮成捕小衝。已か身身
 望む吏深し。然る小依り。潜小北陸宮成北國へ迎へ。國人を懐け。斬り勢を
 得る平家を追落し。今ハ望も足ぬとかり。処かりゆら。ぬ。四宮位小即おひ

今乃巧々詛醉し不測の隠謀を思ひ今乃中乃彼成謀戮しむむんを由
 せし大妻小舟ひいしとさも誠しやふ懼し多小原來知安に復たた鼓
 乃上手少く諷到官と異名も風流者なれども心頑不知味く彌慢乃小人
 かねて行家が約を信し大いおとらぬ如斯なると再度帝都大乱おまふ
 如何して木曾成亡とて死と同行家や多先内々中洛中の高買觸
 近年兵乱も續く諸國乃通路絶公乃貢税上とせぬ八朝廷更の外御困窮
 かり依り諸品御買上の物以前より半減の價中と上納し其代公用の
 外ハ心任せの價小く賣賞とせぬと言渡さむ多怒り町々も能更し御公用
 成名くして俄小緒品高直小成をせぬとて木曾小属も北國乃諸軍日々
 乃賄ふ手成は死更を左右小託り自國へ歸る輩數多あは人是義仲が勢
 成減むるの謀かり然して院より義仲へ急小平家を追討し三種の神皇を
 還御せしむるべしと嚴く宣旨あはむ彼已事成得む不勢なから西園へ下向

せん其後ゆく鎌倉院使をまされ義仲平家と合射し帝都成龍をまそ早
 く弛上りて帝殿を守護敵寇を防ぐべしと中させむ頼朝畏く弛上
 りぬし然るを義仲前小平家あり後小頼朝あり進退更も途なく自滅せ
 更堂成指が如くと罪并成逞くと貌多ふと知安大い悦び是より法皇へ
 義仲が更を時々小統し心腹乃者を洛中へ分ちて公用乃緒品以前より半減
 乃價中と上納し其代不在京の武士諸卒小以前より一倍の價中と賣上納の
 損負成補せし但し此更院の密勅を固く秘せむ若武士へ洩を者ハ三候
 成刑せしむるべしと觸りしとれぬ洛中の高買大い悦び堂上御用乃緒品を
 半減中と納り自余の賣買を以前より三増倍の直となり是れ依り朝
 家と潤ひ賑ふも市中乃困窮りなむなく在京の武士未々の士卒が軍用
 小差殊も更を左右小託り全國へ飯る者引ゆきむと初六萬騎と中へ北
 國勢も漸々小減し今ハ三萬騎小不足なりぬ木曾殿も初乃程ハ何故も



カノ内侍

三



義仲
行家
参内
任官の
図

薫工内侍

六

知むべき事一々竊小間者成とて探りてやむ事。法皇の密詔より諸品物
 上直ふなり。武士の在京成りて自國へ歸る由を以て木曾殿大の孩きむひ
 平家まじりて味方の勢成減しむ。いづる御政敗也。是必くも倭人の
 所為かるといふ。急死院泰一と事の理非を奏せしむるも倭者は是を
 遮りて執奏せしが。木曾殿の愁病上り達せしむ。益物價貴く成るるを齒と
 切く憤らる。是院を死せしむる弟二條なり。然るも平家ハ知盛教経の武勇
 小依り山陽道を伐靡し兵勢強大なり。早播列せしむ。攻上りて由緒方
 より都へ注進とて事敷浪のちりて。洛中の上下大に周障せしむ。如何なる
 世不成中と安死心なり。院も亦らうせむ。行家義仲急死平家
 次追討とて一命一む。行家ハ音あれ所方と稱し引籠
 リて。木曾殿自己の勢許せしむ。征伐せんと有也。今井樋口等練るる中。此頃
 朝家乃御も其意成得ざる事多し。行家の所存も量りて。先々二

将成下し平家乃鋒鋒成試能敵味方乃機を見定て後御馬を以て
 木曾殿と中を以て。木曾殿実中と信濃國乃任人矢田判官代義清宇野
 平四郎行廣兩人小五千余騎を授て西國へ下されり。

備中水嶋合戦之條

却統平家ハ山陽道を横行し兵勢成得備中國水嶋小城を搆。能登守
 教経を大将とて。侍大将小越中次郎兵衛盛嗣上総五郎兵衛忠光起陣
 三郎兵衛景家其外村田采田以下二千余騎と建菴里船手小本三位中
 将重衡越前三位通盛を大将とて五千余騎。二百余艘の兵船に乗て嶋の
 西南より東北に平小成り漕浮り。源氏の勢ハ兵船小取乗し押出さる。が
 矢田判官代義清下知りて。嶋の南より北まき三町小に過り。身方嶋の
 東より寄り嶋の北まき船成連り。次第小陸へ攻上り城小穴成りてをなす。敵
 徒船小乗んとて周障し。手りて船小乗得るとも海上小日成送し。浪小

引き船小漂人さへ浦を渚々追詰り討取機小乗し八嶋を攻渡り平
 家た下し盡きんと手小取て言々諸軍勇之悦み壽永二年閏十月朔日
 の朝も夕も櫂艦成漕中追手宇野平四郎行廣高梨六郎高直三千
 余騎搦手八矢田判官代義清仁科次郎盛宗二千余騎各減を告りけり
 攻寄る平家侍致も更なれ些も動せぬ減を合せ矢軍成りて逆雄の
 北國勢四五百人船を下り陸小撃て上まむ城兵も三百余人城戸を用て
 出互小鎬を削り戦ひ多う平家兼巧人偽り負て引退くを源氏勝
 小乗追鬼船より追陸ちて上る海上乃平家船がく漕来りて兩
 方より雨のしく箭成射るを城中より日、箭襖を作射とす北
 國勢のての手空案小相違り三方より射とまされ足成まゝ我先小引
 返り船小取乗人討者數多と漸小船小乗と漕出と折しゆ
 あき西風烈しく吹あき高浪乃為小船をゆれ北國勢船中小五隻能て

船底小重と伏平家水戦自在成得れを風波を更とせ漕付く捕り
 伏し八搔首ふ或と捕り海中投込むゆの高名成頭ぬまゆ此日九
 分の日蝕む九つ過ふ日色搔曇りさか夜如くかれ源軍魂を消し
 東西成弁と風小随ひ漂ひり矢田判官義清中心絆を剛なれども汰揚ふ
 船小足成まの船小腰ちけり迎者敵成切拂しゆ在る多成越中次
 郎兵衛盛嗣能敵ごんかき船を躍越り撃とる義清由然知りしと
 太刀取整正し甲の鉢を丁ど切大カ小撃まき盛嗣目眩り敵成見定ごとと
 どのあらぬ勇士なれを盲撃小丁斬其太刀義清か面を押付り板りて筋
 違小切付りさよとの義清大吏乃手なれ其免音小倚る盛嗣引
 仰向く首成搔り宇野行廣村田兵衛盛房と引組り足踏とるゆも小
 海中落人多成飛弾三郎兵衛景家は成刀々猿臂を伸し盛房が総角
 とつ引返り兩人が組合とる搔抵り船中投入り行廣も早足の勇士ふ

まゝ盛房が起上りんとまゝ踏へ刀拔り胃の透間をさりと刺景家まゝ
 起上り行廣が甲成曳仰向く首成掻切上りたり。景家已ふ七旬小近き
 老年まゝ。唯今の怪力敵味方乃眼を獲へ能登守教經ハ當代無雙の
 強弓ふく八人張り大弓小笛竹の如た箭前成番指取引結射られまふ空矢
 一筋も有むこと高梨次郎高信成首とて究竟乃勇士十七人其余の雜兵
 ハ數もむ。或太腹成突と射通され。或二人串刺射貫くあんど保
 え乃鎮西八郎為朝中も考らざる積兵をれ。源軍栗をれ命成限り小船
 漕退西園へ落るもあり四園へ連中有り散々成成ふ。此日平家入射取
 一音矢田高梨守野を首二千余人ととせり

妹尾父子及忠兵衛戦死之條

斯く源氏乃敗兵都へ逃上り敗軍の條成木曾殿(往進)され。大乃憤
 り成予北國小義兵を上り。以来一度も不覺を獲ざる。小義清行廣

兼成小軍一々其身成亡のまゝ我鋒小疵成付ると安くとね上り西國
 下向平家の根成断兼成枯へんと大急小勢揃一降人妹尾太郎
 兼安成先導一逞兵一萬七千余騎成引率一残る勢ハ遍口次郎兼光小
 附洛中の傍獲と。十月四日小都を啓行ある。十郎行家判官知安小ハ大
 乃悦び此虛小乘一法皇小統一々義仲小自滅させんと急心小院泰一々竊
 小奏一々小偕も木曾義仲義北陸宮成位小勸め巴國權成握人小前々
 頼朝と約せ一誓言小背死自身一人上洛一々平家を追洛中成処成りひり
 外先帝の四乃宮御位小即せ成心針一時小画餅と成一深く憤り
 内々平家と和義を謀り君成怒まると首維り洛中成緇歌
 一其小因一々木曾小隨逐せ北國武士も心ある輩ハ其非義を思成
 皆自國へ引成り此度木曾が西國下向も表へ平家殊伐一号一い。其実を
 平家と合謀せんとも刃を以て其を奈何とされ。此度木曾が先導瀬尾又子

平家普代の郎黨少く更ふ二君小事者ふあむと。義仲妹尾を先導
 せむととも西國筋の先導維う知さる人並る妹尾が先導すとさる者ハ
 西國の武士ハ此度の下向其実と平家追討あむさる成觸ちることを為し
 る。頭然り木曾が我俣さあふ。平家は是と合躰せむ由り。其御大事ハ
 い。急死関東へ義仲妹尾の院宜を下され頼朝の上洛を急ぐ。鎌
 倉勢がもつと。帝都が守護させむと。天運の奏しるふと。法皇御警死
 大方介らむと仰る。朕ハ北陸宮が位ハ即さる。義仲の遺恨ハ扶人あむと。我
 恐るこく久くそ死果して渠不良乃心成護せり。北上ハ兵衛佐が勢召上り
 帝城を傍護させんと。一熊の御高議あむ及むむと。義仲妹尾の院宜を
 あむと。若内左衛門時成を以て潜り関東へ下り。いぬ。嗚呼。是如何なる
 層慮とや。昨日も平家の為小困られし。一日も早く源氏攻上り。と足
 成翹ぐ待せむ。御身の適義仲の軍功あり。愁眉我開れし。い。

忽ち變者之言を信じて科たれ木曾成悪む。追討の御汝汰ある。更矣薄
 情ある。脚心浅さかり。木曾殿とさる。更成夢あむと。せむと。妹尾を
 先ふさ。備中國船坂山まで下られ。妹尾兼安らむ。木曾殿を賺し
 今一度平家へ弛加りて先敗の耻辱成も雪れ。且今や木曾小降し。分統
 せん。おひ。木曾殿の御前小出や。前路も某が知行所む。い。旧
 好の者成さる。且兵糧馬草の準備をな。い。御勢小離。先小進
 い。木曾殿。木曾殿。い。と許容あり。諸倉先三郎を竊。小招
 せ。仰。妹尾之心。実小降。泰。者。あ。成。知。と。西國の先導と
 と。平家を亡。後。妹。今日。助命。成。只。今。予。軍勢
 と。引。別。先。進。て。兵。糧。馬。草。の。准。備。せ。ん。と。是。決。深。死。所。存。有。下。汝
 妹尾と俱。先。進。其。動。止。を。窺。ひ。心得。さ。更。あ。む。早。速。小。進。せ。と。と
 妻。云。令。め。妹。尾。と。俱。先。小。進。せ。む。妹。尾。ハ。木。曾。殿。を。謀。を。取。つ。と。い。

倉光と路次より討人事安らり多しと俱小約をたぐり路を逸め和氣の
 渡り東叡野寺といふ処小者其日古御堂小陣を取らるる妹尾公近藤
 小往く兵糧取きとんと手勢遺し子息小太郎兼通郎黨の
 家俊只三人出行り倉光も木曾殿の内意受られも渠手勢を傳り
 出行り実小兵糧を取きとんと人為るべしと心を著し陣中小安臥りる妹
 尾公倉光を謀らるる程近草壁といふ処馳至り兼安と木曾成敗り
 故郷へ飯まゝ又新泰の奉公初小木曾を討て平家へ馳参り人むろと曰好
 をかり小者拮柴二三把げ準備して我小續よと觸回る程小若者ども大
 悦び手毎く小拮柴二把三把は取持て催捉小應むる者八十余小及惣
 妹尾勇之悦び叡野寺へ忍び行堂の軒小拮柴を積上火をうけて喊を嘯と
 造り多れむ倉光が手の者寐耳小立て大狼狽須驚馬出火よと聞所小
 兼て手寄や合しえ妹尾が郎黨ども拔連く切廻る兼安又子も緒卒小

下知て切せらるるむと倉光が勢内外の敵小掃きとれ討る者八多く助る者之
 稀かりるる倉光三郎大い怒り諸小妹尾小出抜きとると安らるる今何の
 面目有て大將の見参小入倉死いでせり程働いて斬死せんと馬小乗間もや
 小具足許や大太刀振掃し兼安何國小ある尋常の勝負をせよと呼り
 く東西小弛回く敵を斬盡せ三人手を負とる者數とるも其身由
 金石かゝれむ太刀疵前疵許負とる今ハ是やがかり名もか死雜兵の手
 小挂らんよりと腹掻切く大中起入亡りる真小此倉光と北陸道小安ら
 武辺の士とて度々の軍一度も不覺の名をとむとがもの妹尾をま虜男多
 小一時の油断より身成亡りるる哀がりる妹尾小安らと倉光を討て手始よ
 一と悦び佐々迫といふ難所小柵逆茂木を植とる切所小ら乃兵を伏其身ハ
 近郷乃百姓郷士野武士山賊をくく唐河の宿か板倉城小立籠り木曾
 勢きくく微塵小かさんと待りけりる木曾殿ハ斯くも知名と今宿といふ処近

うせて宿陣有る小其曉倉光が討つる者ども追々小馳まきつり妹尾が
 及忠小因る倉赤三郎戦死せしり我討つる者ども木曾殿大い怒りぬいひ
 てうは義あんと察し倉光小謀を言合ふ却て欺られざるを不覚あれど
 敵小勢の着さる以前小蹴散さん倉卒小手賦し烈風うごくおせて進發し
 甲侯を出して敵の動靜を探せしる小其者まきり前路甚悪所ゆ中
 小佐々迫の難所小柵をより谷口小敵勢多く聲妹尾小板藏城小籠い由
 小いと言上と木曾殿はあひ敵の時集り勢立て甲斐く一死者有るが
 くれども難所小勢を置され侮りごと外小通るべ死道の方さう土地の者ど
 呂宋て先導させしと命せしる手塚光盛承り迫迫を弛回し入る老
 夫成伴ひきさる木曾殿深小向ひ佐々迫を徑ごと外小板倉城小向つ死道
 や有と回り老夫答ふ某小樵をいひ粗知り此路を北より鳥岳とく
 処を起佐々の井中成徑とせせむ佐々迫の後出板倉城小徑近くい

小中木曾殿悦びあひささむ汝先導せし恩賞を望小任と下とて渠老夫を先
 小立難所を回つて敵の後出喊を造て蒐至まを敵勢あひひつる敵
 小心孩れ一支もささむ我先中と迷惑に討つ者數多し木曾殿八渠等と蒐散
 一短兵急小板倉城小押寄曳き色を出して攻まらる妹尾八是程小まで敵の早く
 寄寄し一八思ふやうを大い孩あぐる緒卒小指揮して散々小射る然れども
 言甲斐かれ寄合勢あれを敵の猛威小怖き手足戦慄て鐘の衰くまぐと射
 中る者か一妹尾小郎黨五七十騎の必死小成て防矢射先小手寄兵を
 百人許と射落し北國勢更ともせど敵を捕小彼く攻付く難なく城戸を
 歩破り我先小と区入當成幸ひ切つ回れ城兵周障狼狽し我小落ん
 踏倒され推倒し八方散乱と妹尾の手の者も此処小討を彼処小射る兼安
 小子息小太郎と郎黨宗俊尺三人小討をされ今小是迫かり八嶋小泰と一門小
 勢小加らんと後の山小落行小小太郎兼通小肥太とく走る更能なく免角隙取

落多^{おち}の^ち多^ち処^こ木曾勢^{きそ}追^おき^まり^し雨^{あめ}の^ふ降^ふり^し矢^やを^う射^やれ^ば妹^い尾^お八^は遯^ひき^ぬれ^ば主^ま從^{じゆ}
 三人^{さんにん}拔^ひ連^れず^敵中^{ちゆう}蒐^{さう}入^りり^又程^{ほど}働^{はたら}か^せ終^つ小^こ主^{しゆ}從^{じゆ}三人^{さんにん}討^うち^つ死^しす^と木^き曾^その^の
 其^{その}首^{くび}も^亦切^き板^{いた}倉^{くら}城^{じやう}を^や焼^や拂^{はら}ひ^備中^{ちゆう}の^萬壽^{じゆ}庄^{じやう}小^こ陣^{ぢん}を^居後^ご陣^{ぢん}を^待て^八
 嶋^{じま}發^{はつ}向^{むか}せ^んと^其支^し度^たを^せれ^多る^お忽^{たち}ち^壬月^{じつ}二^に日^{にち}小^こ京^{きやう}師^しの^田守^{しゆ}居^ゐれ^残り^す
 樋^ひ口^{くち}次^じ郎^{らう}兼^{かね}光^{みつ}が^早馬^ば着^{ちやく}到^{たう}十^{じゆ}郎^{らう}行^{かう}家^けが^總奏^{そう}よ^りて^法王^{わう}の^密使^し鎌^{かま}倉^{くら}小^こ
 下^{した}王^{わう}頼^{らい}朝^{ちゆう}當^{たう}家^けを^誅伐^{ばつ}せ^んと^大軍^{ぐん}を^攻上^{かみ}り^街の^風統^{とう}殖^{しよく}く^い至^{いた}り^て脚^{あし}
 飯^い陣^{ぢん}あり^其脚^{あし}手^て當^{たう}か^くん^を由^よぢ^れ脚^{あし}大^{だい}妻^{さい}小^こい^んと^大汗^{あせ}小^こ成^{なり}て^注進^{しゆ}と^木
 曾^そ殿^{でん}大^{だい}い^ふち^をら^れま^り今^{いま}予^よ八^{はつ}嶋^{じま}を^攻め^平家^{へい}の^根を^前三^{さん}種^{しゆ}の^神馬^まを^還脚^{あし}
 か^しを^らん^とま^る時^{とき}小^こ當^{たう}り^法皇^{わう}倭^や人^{にん}の^言成^{なり}信^{しん}く^る脚^{あし}奉^{ほう}動^{どう}何^{なに}吏^しを^も噫^あ呼^い
 上^{かみ}天^{てん}義^ぎ仲^{ちゆう}功^{かう}を^奪む^らう^とて^天を^睨恨^{ごん}涙^{なみだ}小^こ胃^ゐの^袖を^漫か^ひり^が此^{こゝ}上^{かみ}六^む時^じ中^{ちゆう}を^引返^{かへ}
 引^ひ返^{かへ}し^頼朝^{ちゆう}と^雄雄^{ゆう}存^{ぞん}亡^{ぼう}の^一戦^{せん}を^遂ん^と俄^{いつ}小^こ馬^ばの^鼻を^引及^{およ}し^都を^さり^てと^木
 木^き曾^そ義^ぎ仲^{ちゆう}勳^{こん}切^き回^{かい}會^{かい}後^ご編^{へん}卷^{くわん}之^之三^{さん}畢^ひ

上りれり

